



山と山小屋

竣工当時の
チセハウスと筆者

本誌第二号で「北海道の山小屋」をテーマとして拙稿を綴ったが、これは多分に自分の趣味的な立場からであった。今回は角度を変え、山小屋の条件とはどのようなものかということに対する私なりの考え方を述べてみたいと思うのである。

一口に山小屋といっても、今日では範囲が非常に広くなった。四季を通じて管理人の常住するものもあるし、一定の季節しか置かないもの、また文字どおりの無人小屋にいたるまでと、さまざまである。したがって厳格な意味ではごく限られた数になるが、いまこれらを便宜上、まとめて山小屋と呼ぶとしよう。

かつて私は、北海道林務部が自然公園内に山小屋を建設した時代、その仕事が職掌の一端であったし、また直接管理面にもたずさわった関係もあって、以来、山小屋の文献を折りにふれては調べはじめた。もちろん現在もこの文献あさはつづいているものの、いまだに判らない点が数々ある。だが北海道の山小屋は、大まかにみて大正末期からその歴史がはじまったことだけは間違いないと思う。というのは、大正期の建物としては大雪山の「黒岳石室(12年)」、手稲山の「バラダイスヒュッテ(15年)」以外に記録された資料が見当たらないからである。

そして昭和一桁から二桁にかけての、北海道の山小屋がもっとも充実した時代を迎えることとなる。しかしそれもつかの間、やがてあの戦時に突入した数年の間に、管理のゆきとどかぬため幾多の小屋を倒壊、火災などにより失ってしまった。なるほど戦後、復旧または新設されたものかなりの数にのぼるが、いまだに往時の状態には達していない。それは数もさることながら、質的な

意味においてである。一言でいうならば、山小屋本来の在り方からだいふズレを生じて来た、と思われる傾向にあるようだ。

というのは、ひとつは小屋の標高が必要以上に低くなったこと。もうひとつは、性格があいまいになったことである。ここに引き合いに出すには多少のためらいもあるが、この問題を痛切に感じたのは昭和三十九年に竣工をみた「暑寒別岳小屋」である。当初の段階では、この山塊の上に建てるという意見の集約をみたはずであった。しかし結果は、標高一九三mに下げられて小屋は誕生したのである。変更理由にはいろいろと事情はあるだろうが、いま、この種の建物がたどりつつある傾向を端的に語るものといえよう。これも時代の要求と割り切るには簡単であるが、その原因を環境と様式の二点から掘り下げて考えてみたいというのがこの稿の目的である。

山小屋の環境

まず、その位置である。普通、山小屋の位置を決める場合、水場を離れてはならないのが第一条件である。つぎが、登山コースからそれ過ぎないこと。それも単独峰はべつとして、なるべく分岐点に近いことが理想的である。こうした実用性からの要求を満たしたうえに、周辺の景観との調和のとれた場所を選ばなければならない。とはいっても、地形・景観は独自の個性を持っているから、山によっては余儀なく基本線のくずれを我慢する、という例も少なくないのが実情である。

ただし、近ごろ登山基地にふえつつある山小屋は、こうした妥協の意味とはなんら関係のないことを指摘して

おきたい。これらは一口にいつて、車道の終点にある簡易宿舎にすぎないのである。ただ単に山小屋風の建物であるがため、ややもすると混同されるきらいがあるようだ。冒頭に質的な低下といったのは、主としてこのことである。

また単に、建築様式や規模ばかりでなく、山小屋の条件には管理人の適否が大きなウエイトを占める。こうしたところに人の問題を持ち込むのは矛盾と思われるかも知れないが、私は管理人の素質というものが山小屋の要素として、欠くことのできない条件だとい切れると思う。飯を食わせ、銭をとるだけの者では、資格ゼロである。いまここで人のことに触れるのは目的でないから伏せるとして、とにかくひとかどの山男でなければ無意味である、とだけいわせていただく。

話を、本題に戻そう。北海道は昭和二十九年、例の「十五号台風」に見舞われた。これが森林に与えた被害は、じつにすさまじいの一語につきる。その一端は、北大の「ヘルベチヤヒユッタ」が誇ったシラカバ林や、いまは国鉄が手離した「奥手稲・山の家」附近の樹林帯が根こそぎやられたのはご存知の方も数多かろう。同様の被害を受けたところをあげれば、この広い北海道である。枚挙にいとまがないほど、といつてよい。しかし全般的には直接、台風によるものよりも、風倒木の処理という人為的な被害のほうが、景観に及ぼした影響は大きくなかったらうか。たしかに材の搬出を急がねばならなかったとはいえ、無軌道ともいえる林道をこしらえたことである。これに加え、ほとんど同じ頃から一般車道が山深く延びはじめ、今日では正気の沙汰とは思われないほど

の狂奔ぶりとなった。そのもつとも極端な例が、大雪縦貫道路である。これについては一言も二言もいいたいことがあるが、稿の目的からされるので伏せるとしよう。

ところで大雪山の山小屋のうちでも、様式と環境が見事に調和したと思われるのは「白雲岳避難小屋（昭29）」であろう。あの位置はハイマツ帯と裸地であるが、よくぞ選んだものと、関係者の英智を憶わずにはいられない。このほか戦後に建てられたものとしては「白井小屋（26）」、「芦別岳の「ユーフレ小屋（昭35）」も同じ意味で、まずは申しぶんのない環境といえると思う。とくに、「ユーフレ小屋」は新旧コースを念頭にした稀なケースである。この小屋については後の項で詳しく述べるが、以上三つは道林務部のこしらえたものであることをここに記録しておく。

一方、車道により環境を破壊されて昔日の面影をなくした小屋としては、「パラダイスヒユッタ」と「チセハウス」であることはすでに本誌第二号にも書いたとおりである。が、かつてその周辺の美林を誇った「ヘルベチヤヒユッタ（昭2）」、「空沼小屋（昭3）」、そして四十四年に国鉄が廃止した「奥手稲・山の家（昭5）」の付近も自然現象とはいえ、今日ではかなりの見劣りがするようになったと思うのは、私ばかりではあるまい。

規模・構造

山小屋の規模・構造も、位置の選定に劣らないほどの制約を受ける。それは予算の枠にしばられた中で、心ならずも妥協しなければならぬからだ。この間の事情を私の関係した小屋のうちで、ほぼ満足に近いかたちで竣

工をみた芦別岳の「ユーフレ小屋」を例にして述べてみよう。

こうした標高の高いところの建物をつくる場合、資材の搬送に思いのほか経費を喰われるものである。記憶によると大体、工事費の三〇％、へたをすると四〇％にも近くなるか。したがってこの搬送費をいかに軽減するかが、規模・構造の優劣を左右するといつてもよい。むろん、このときも人力に頼った荷上げである。そこで当時の山部村長・日野政史氏と相談のうえ、地元山岳会の協力による搬送費の節減をはかった。しかし結果的には思わくどおりになかったのだが、かろうじて工事費・五〇万円に見合う小屋をつくり得たと、いまでも思っている。現地で見られる資材の限界点ということで、あの標高六一〇mで我慢するよりほかはなかったようだ。この小屋がほぼ満足のゆく条件で完成をみたことについて、いま少し具体的にふれてみよう。それは居住性――規模・構造にも関係するからである。

元来、避難小屋には便所をつけないのがたてまえであったが、この小屋で、はじめて従来の型を破り得たことだ。これも前述のような、地元側の協力があつたからこそ、というのが私の推測である。いまここでその設計の裏話にふれる余裕もないが、室内に臭気はこないし、とくに冬期には快適であると、数多くの利用者から喜ばれているといえは事足りようか。これまでの避難小屋に対する考え方からいえば、簡単な便所とはいふもの、かなり贅沢な要求である。ややもすると設計変更になりがちなこの種の建物では、除外される可能性の強いものと思わなくてはならない。それが当初の計画どおり実現し

ただだから、設計者にとってもこんな嬉しいことはかつてなかったと思う。

それに引きかえ、昨年改築をみた大雪山の「忠別小屋」である。じつは、はじめの設計書を見せてもらっていた関係もあって、竣工を心待ちにしていた一人であった。ところが、できあがった小屋の写真をみると、設計書とは似ても似つかぬものとなり果てたばかりでない。安っぽいパンガロー風の建物である。あとで聴いたところ、工費節減からの設計変更で……という始末である。もうこうなると、規模も構造もあつたものでない。大雪山に、ああいうものがあるということ自体が、恥ずかしいのだ。普通、小屋の寿命は木造で約一〇年とみるべきであるから、金属製の建材が用いられる近ごろのものは多少、耐久年度も伸びる可能性が出て来た。それだけに、この小屋の俗悪さが気にかかるのである。

しかし居住性は、建築様式の良し悪しとはそれほどには関係しない。残念ながら私はこの小屋の厄介になっていないので、憶測から居住性を語るのには差しひかえる。が、個人の趣味からいわせてもらうならば、こういう形の小屋の中にいることを意識するだけでも、あまり気分よいものとはいえないとだけはいわせていただく。小屋とは風景に調和した美しさを持ち、しかも居心持のよいものでなければならぬと思うのである。この二つの要求をこわす要因は、土地条件よりも予算の制約によるほうが、はるかに多いようだ。この「忠別小屋」ほど、それを如実に示す例はないだろう。

こうした実例をみるたびに、居住性という一つだけの目的に絞れる建物を思わずにはいられない。それは南極

基地における施設である。極地の気象に耐え、内部構造が日常の生活にはば満足ゆくことだけを考えればよい。それも予算は、じゅうぶんとはいえないまでも莫大な額に及ぶ。焦点が絞れるだけに、工法としてはきわめて単純なものとするのは素人考えであろうか。余談はさておき、工法にふれてみよう。

昭和二十七年、北海道電力が「冷水小屋」とともに再建し、現在は北海道大学が管理している「中山小屋」の構造である。入口の扉が表開きになっているため、雪積期はスコップを持参しなければいけないこともできなかった。これは設計者が風土条件を考えなかったことによるミスであるが、あまり周辺の風景との調和であるとか美観に神経質になって失敗した例もある。昭和二十五年に道林務部の建てた「チセハウス」が、それである。風景とのバランスを考えて屋根の勾配をゆるくしたため、この種の建物として雪おろしをしなければならないというまことに珍しい結果となった。また当初、風呂場(温泉)の湿気が屋内に充満したことから、これを別棟とするなど内部構造の変更をみたことは知るひとも多からう。

建設後、このように居住性の不満から徐々に手を加えられる例も少なくないが、単に収容能力をふやすための内部改造、ときには外観さえ変えられるものがある。昭和十一年に建てられたニセコ「国鉄・山の家」が、そのもっとも代表的な例といつてよい。竣工当時、イワオヌブリに面してペランダがあつて、一応、小屋らしい姿であつた。その後、二十九年、三十二年と二回ほど増改築され、収容能力は当初の約三倍にもなったはずである。そのかわり、昔日の面影もないほどみずばらしい形

の小屋となり果てた。おそらく北海道の数ある山小屋の中でも、これほど手荒な扱いをされた例はないと思う。

もともとこの北海道には、営利を目的とした山小屋は存在しなかった。しなかつたというより、し得なかつたというのが実情である。それがここ数年の間に、車道が急速に奥地へ伸びはじめたため、山小屋の環境を根こそぎ破壊するところもできて来た。その最たる変貌をみせたのがニセコである。かくて交通が便利になつたおかげで、山とはまったく縁のない者までが運び込まれる、いわゆる観光地と化した。「国鉄・山の家」が増改築を重ねた原因は、これに歩調を合わせた営利追求の手段にはかならない。すでに国鉄は、利用者の激減した「奥手稲・山の家」を四十四年に廃止している実情からも、山小屋経営を完全に企業化しつつある意図が伺われる。聴くところによると近く莫大な資金を投入して、この「山の家」をホテル化する計画を持っているそうだ。すでにこの地帯は山小屋を置く環境ではなくなつた今日、当然のなりゆきといえるかも知れない。

しかし原則としては、山小屋の原形をこわしてまでも収容能力をふやすことは慎むべきだと思う。また私は見届けていないが、大雪山「黒岳石室」には別棟の小屋ができたと聞く。はたしてどのような建物であるかは知る由もなし、またとくに論議だてする必要があるまい。ことさら不調な様式でない限り、規模・構造に不満の多かつた石室ではあるが、直接これを増築しなかつたことを買いたいのである。ここはニセコのような環境とは違い、あくまでも山岳景観との調和のうえで建築物を考えなければならぬところであるからだ。

これらに似た増改築をした山小屋もまだあるが、字数の関係から省略させていただく。それについても思うことは、昭和初年に建てられた北大関係の山小屋である。今日まで内部改装も、ましてや外観に手を加えられた例のないことだ。その理由は、山小屋として完璧な構造であったことにもよるだろうが、何より営利を度外視した管理体制によって、維持されたおかげと解したいのである。

以上、標題について私感を述べたものの、まことに意のつくせないものとなってしまった。なるべく要旨をまとめるように「環境」と「様式」を別個に扱ってみよう。ことさらに分類したのも適切ではなかったようだ。意に反してあまいな稿となった原因は、この発想の誤ちと拙文によるものである。とはいっても、さしあたってこれという妙案があるわけではない。やむなく平素考えていることをもふくめています。こし追記し、いくぶんなりとも要旨の不備を補うとしよう。

ご存知の方もあると思われるが、長い間の懸案であった「羊蹄山避難小屋」が去る十月上旬に完成をみた。ところでこの小屋の事業費九〇〇万円、うち工事費は八四四万六千円、資材の空輸費（ヘリコプター代）二六〇万四千円と、ある。私の知る限りでは、北海道の山小屋でこれほど最大の経費を投じたものはないはずだ。国費半額補助とはいえず、よくぞついたものと改めて思う。それほどばかりではない。工事費と資材の搬送費——ヘリ代の比率が、かつて人力によらねばならなかった時代とまったく同じ三一%と出たことも思いのほかであった。

こんどの小屋の位置は、これまでの小屋よりややニセコ町側に寄った標高一、六六〇mの台地という。それに

この山にはむろん車道がついていない。たださえ鼻息の荒くなった労働者を使う条件としては、最悪の場所である。したがって機械力による資材搬送を念頭にした予算処置であったろうが、設計者の苦勞は並大抵でなかったろう。たまたま私は、その実務を担当した道自然保護課の越智憲良さんとは「ニューフレ小屋」の建設で苦勞した間柄である。今回の様子を聴いたところ、案の定、資材の選択にかなり悩んだらしい。結局、校倉造りに落ちついたわけであるが、現場での工事日数を減らすにはこの様式しかなかったようだ。しかしこの小屋が工法上の理由の如何を問わず、校倉造りで装を新たにすることは満足としなければならぬ。

工事日数の短縮、搬送資材の軽減という二つの制約を余儀なくされる現在、たとえ現地で石材が得られるとしても、それに伴う資材（セメント・砂）の搬送でゆきづまる。金属製の骨材を使えば、溶接作業を現地で行なければならない。など、いくたの隘路を考えると、組み立てるだけの作業ですむ校倉造りになるわけである。しかもこの様式は、特別な意匠のない限り、風景との調和をこわす怖れは少ない。私の満足しなければならぬといったのは、その意味からである。山という特殊条件に限らず、今日では、いわゆる職人芸なるものは求められなくなった。極端な表現になるかも知れないが、工場で大量生産される資材をただ張り合わせるだけである。そのうえ資材を、より少なく、より工事日数を減らさなければならぬ条件下では、今後さらに制約のきびしさが加わることを覚悟しなければならぬ。

こうした山小屋造りにまつわる時代の影響や利用者の

実態などをつぶさにみてまた私は、山小屋の在り方に疑問を持つようになってから、もうだいぶたつ。それは一口にいって、登山客の質の変化である。交通の利便から起きた爆発的な利用者の増加が、必然的に山小屋を巷の延長と化したことだ。深夜まで飲み、かつ唄いまくる。目にあまる騒ぎ方に、つい、どなりつけたことも何度かあった。しかし、これが返って自分を不愉快にする効果にはなっても決して彼らに効き目のあったたためがない。それだけでなくとも雑踏をきわめる山小屋に愛想をつかし、テントに頼るひとがふえて来たのも当然の結果であると思う。

こうした異質の利用者を運び込む車道はますます標高を上げてくるだろうし、それがまた既存の山小屋を環境もろとも、台なしにするものと予測しなくてはならないとすれば、これまでの山小屋の改築であるとか新築とかは、おそまきながら根本から考え直す必要があるように思われる。しかし、定山溪営林署が「万計荘（昭40）」、静内営林署が「ペタガリ山荘（昭44）」をこしらえたようには車道の終点、利用拠点に思い切ったスケールの大きなロッジをつくるよりほかはないようだ。言葉を変えようと、激増する異質な利用者にフィルターをかけるということである。くり返すようであるが、少しましな山歩きをするひとたちによって、すでに現在の山小屋なるものが見捨てられつつあることをも考えると、その構想に対して姑息（こそく）な手段であってはならないと思う。それがまた集落地帯の、建造物の卑俗化を防ぐ役割をも果たすのではないだろうか。

（北海道山岳写真連盟・副会長）